

主 論 文 要 旨

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	吉川侑輝
<p>主 論 文 題 名 :</p> <p style="text-align: center;">日常的活動のなかの音楽の観察 ——練習場面におけるエスノメソドロジーを中心に——</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本博士学位請求論文(以下、本論)が試みるのは、練習場면을主たるフィールドとした、演奏活動のエスノメソドロジー研究である。こうした作業を通じて本論は、既存のエスノメソドロジー研究や音楽研究を展開していくことをめざす。本論は、以下の7章から構成されている。</p> <p>まず、第1章から第3章では、本論が経験的研究を開始するための、準備的な作業が行われる。</p> <p>第1章「序論」では、既存の音楽研究を検討する。ここではまず、音楽という現象の特徴を提示するという本論の目標を提示し、それを遂行するための方針を考察する。まず、音楽の日常的な観察と科学的な観察の関係を示したうえで、前者を主題化すること意義を主張する。また日常的観察の明確化を遂行していくために、本論が非専門家たち(素人)による観察というよりはむしろ、専門家すなわち音楽家たちによる観察を跡づけていくことの正当性を論じる。そのうえで、そのような観察を解明していくために「練習」場면을フィールドとして、「演奏」にかかわるエスノメソドロジーを解明するということを、本論の目的として提示する。</p> <p>第2章「先行研究——練習場面における演奏分析にむけて」では、本論にかかわる先行研究を検討し、本論の課題を明確にする。具体的には、音楽にかかわるさまざまな活動のエスノメソドロジー研究を収集・検討することで、既存の研究の到達点や特徴を明確にすることが試みられる。こうした作業をつうじて、音楽にかかわる活動のエスノメソドロジー研究が近年、実に多様なフィールドにおいて展開しているだけでなく、発話などを利用しながら練習場면을組みたてていくための相互行為や、楽器演奏を利用しながら音楽を組みたてていくための相互行為といった、さまざまな現象を対象としていることを明らかにする。こうした作業を進めたうえで本論は、練習場면을フィールドとして、人びとが演奏を組みたてていく方法を明確にするという課題——こうした課題を、「会話分析」に対して「演奏分析」と表現することもできるであろう——を設定することによって、音楽にかかわる日常的な活動の編成それ自体を探究していく、という方針を提示する。</p>			

第3章「技術についての注記——想起としての分析」では、本論が経験的な研究を開始するのに先行して、方法論にかかわる、理論的な考察を実施する。より具体的には、この章では、エスノメソドロジー研究における認識論的な議論を収集・分析することで、研究者たちが日常的に——むろん、それでいて専門的に——利用しているような様々な人工的な技術と、それによって探究されているような日常的実践の関係を、見通しのよいかたちで記述することを試みる。音楽を探求する専門的な研究者たちは、その活動において、ビデオカメラや録音機材を利用すること、トランスクリプトを作成すること、そしてデータ集を作成することなどの、人工的な技術を利用するであろう。しかしながら、しばしば指摘もされているように、一見すると、こうした人工的な技術の利用と日常的な活動を探求することの間には、困難な関係が存在しているようにもみえる。事実、ときに人びとの実践から乖離したりすることもあるようなこうした技術の利用をつうじて収集されたデータを分析することで、人びとの日常的実践の詳細を明らかにすることが可能であるかどうかは、それほど自明なことではない。これにたいして本論は、エスノメソドロジー研究者たちが人工的な技術を利用することによって従事しているのが、日常的実践の詳細を効率よく想起することを支援するという作業にすぎないということ、ゆえにこうした専門的な技術と日常的活動の探求とが、決して矛盾はしないということを、エスノメソドロジー研究における認識論を概念分析と関係づけながら論じている研究などを参照することを通じて、確認していく。

第4章から第6章では、第1章から第3章の議論をふまえたうえで、練習場面における経験的調査にもとづいた演奏分析が具体的に進められていく。

第4章「練習場面におけるエスノメソドロジー (1) ——アンサンブルにおける演奏の提案」では、アンサンブルや小さいオーケストラのリハーサル場面をフィールドとして、演奏の開始直前における音楽家たちのやりとりに着目する。ここで焦点化されるのは、音楽演奏における「同期」という課題が、当の音楽家たちによってどのように理解され、取り組まれているかという事である。アンサンブルの開始場面のビデオを用いた相互行為分析をつうじて本論は、音楽家たちが、{1} 演奏の提案、{2} 楽器の準備、{3} アインザッツの提示、そして {4} 演奏という4つの部分からなる連鎖構造をさまざまに「変奏」しながら、演奏における同期の達成という課題に対して、その開始の合意を得るための公的な方法に取り組んでいることを例証する。このようにして本章では、音楽における同期を達成するために音楽家たちがいかなる方法を用いているかということや、そのような方法が合奏場面において備えている合理的特性を、事例にそくして明らかにする。

第5章「練習場面におけるエスノメソドロジー (2) ——相互行為としてのチューニング」では、音楽活動における「ピッチを合わせること」という基盤的な現象がいかんして達成されているかを、音楽家自身が従事しているひとつの日常的な課題にそくして特定する。より具体的には、この章では「ピッチを合わせること」の社会性を解明するために、アンサンブルにおけるチューニング場面に着目する。複数人でおこなわれるチューニング場面のビデオデータとその断片から作成されたトランスクリプトを利用することで本論は、音楽家たちが、チューニング活動のただなかにおいて、自らの楽器における音高がすでに調整されていることを標示 (demonstrate) するための表現形式 (この表現形式は「n+n+s」と (要約的に) 表現されることになる) が利用されているということを例証する。こうして、チューニング活動においてとりくまれているひとつの技法を明確にすることで、「ピッチを合わせること」がそなえる社会性が特定しなおされる。

第6章「練習場面におけるエスノメソドロジー (3) ——ひとりでおこなう練習の理解可能性」では、ひとりでおこなう演奏の公的な理解可能性を解明していくことをつうじて、ひとりでおこなう練習の特徴を明確にしていくことが目指される。本章では、こうした課題を遂行するために、本論の著者みずからの練習場면을対象として、ひとりでおこなう演奏のビデオデータを分析する。より具体的には、こうした分析をつうじて、即興演奏において適切な旋律を産出することや演奏における誤りを訂正するためのさまざまな規則が、練習のなかのひとつのふるまいにおいて、多層的に利用されていることがあきらかになる。そのうえで本章では、ひとりでおこなう演奏が、潜在的には他人にもまた理解可能なかたちで編成されているのではなくては目下の練習が自分自身でも理解可能なものとはならないことや、演奏がそなえるそのような特徴が練習という活動の特徴をかたちづくっていることが主張される。

第7章「結論」では、本論における経験的研究をつうじて得られた知見と、それが先行研究に対してもたらす貢献とを議論したうえで、本論全体の結論や展望が述べられる。この章では本論の分析を辿り直すことによって、音楽の日常的な観察において利用されているプラクティスが、(1) 言語性、(2) 日常性、そして (3) 複合性を備えていることを論じる。そのうえで本論では、こうした知見が既存の会話分析や演奏分析をより体系的に展開していくことに貢献できる可能性を主張する。また日常的な観察の再特定化を遂行することによって、既存の科学的観察が自らの探求をより省察的に行うことが可能となる可能性などを論じる。そのうえで最後には、調査対象やフィールドの拡張などといった本論の課題や展望が論じられる。